

# 博士学位論文審査要旨

2018年6月13日

論文題目： Pilgrimage in War: The Influence of the Second World War and the Theme of Vocation in Evelyn Waugh's Later Novels

(戦火の歴拝—イーヴリン・ウォーの後期小説における第二次世界大戦の影響と召命のテーマ)

学位申請者： 有為楠 香

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 臼井 雅美

副査： 文学研究科 教授 斉藤 延喜

副査： 文学研究科 教授 金谷 益道

要 旨：

本論文は、イギリス20世紀の作家であるイーヴリン・ウォー (Evelyn Waugh) の後期の作品、特に1940年代から1960年代に発表された小説を時代順に取り上げ、その中でも最後の作品となった『名誉の剣』三部作 (*The Sword of Honour* trilogy) を軸として、第二次世界大戦が社会に与えた影響とその葛藤の時代におけるキリスト教の召命をテーマとして考察されている。第二次世界大戦勃発に伴うウォー自身の従軍経験を契機として、ウォーが戦争と全体主義への批判を作品のみならず書簡や随筆においても表明し、戦後もその姿勢を崩すことなく一貫して小説に反映させ、そこに神話の再構築を行うことで独自の文学を創り上げた特性に着目し、歴史的事象と神話を精緻に分析して議論が展開されている。構成は八章からなり、第一章から第六章までは概ね出版された順に各作品を論じ、第七章は全作品を通してウォーが描いたヒロイン像を探求し、第八章は後期作品の集大成としての『名誉の剣』におけるウォーのカトリック教観を軸に論じられている。

第一章では、1942年出版の『さらなる旗を掲げよ』 (*Put Out More Flags*) における第二次世界大戦勃発に起因する世界観の崩壊と、戦争という個人を抹殺する暴力的行為と個の表現である芸術との対立こそがウォーの戦争批判の出発点であると論じられている。第二章では、1945年出版の『ブライズヘッド再訪』 (*Brideshead Revisited*) において戦争によって引き起こされた私的領域と公的領域の葛藤が、主人公とオックスフォード、ロンドン、およびブライズヘッドの三つの場所との関係性の中で論じられており、その葛藤の中で生まれてきた宗教に対する心情の変化を分析している。第三章では、1950年出版の『ヘレナ』 (*Helena*) では、第二次世界大戦とナチス・ドイツが古代ローマ帝国を舞台とした聖人伝のモチーフに埋め込まれている点を軸に分析し、その中で20世紀における「召命」を中心テーマとして打ち立て、作者の戦争批判と全体主義批判を顕著に表す作品であると結論付けている。

第四章では、1948年出版の『愛された者』 (*The Loved One*) と1953年出版の『廃墟の愛』 (*Love Among the Ruins*) に関して、第二次世界大戦後のイギリスとアメリカの変遷に注目して論じた。『愛された者』では商業主義に徹しているアメリカにおける葬式産業と映画産業との共存を不妊に関連づけて議論している。また、『廃墟の愛』においては、戦後のイギリスにおける労働党内閣による福祉政策を批判し、戦後の全体主義体制への警告としてその極限状態を描くことでディストピア小説を完成させたと論じている。第五章では、『名誉の剣』三部作の中で19

52年に出版された『戦士たち』(*Men at Arms*)と1955年の『士官と紳士』(*Officers and Gentlemen*)の二作が20世紀における戦争体験を神話のモチーフの中で語っている点に注目して分析している。『戦士たち』では、アフリカに送られたイギリス軍人と架空の十字軍戦士を対峙させ、『士官と紳士』においてはスコットランドとクレタ島に送られたイギリス軍人とギリシャ神話のクレタ島王ミノスを対峙させることにより、ウォーは現代の英雄像への批判を行っている論じている。第六章では、三部作1961年の『無条件降伏』(*Unconditional Surrender*)は、ウォーが一貫して取り組んできた公的領域と私的領域の葛藤を公文書と対話との葛藤において描いている作品であり、キリスト教徒の軍人とユダヤ難民の女性との対話が「召命」へと導くものであると論じ、ウォーの戦争批判に繋がると結論付けている。

第七章では、初期、中期から最後の作品群までに描かれてきたヒロイン像の変遷を考察し、ウォーが描く女性が作品に与える意義を論じた。戦前の作品においてはヨーロッパの運命の女神フォルトゥナをモデルとするヒロイン像が描かれていたが、戦後はその女性像を葬り、階級や出身が異なる多種多様な女性を描き、女性が男性の宗教的成長に与えた影響が大きい点を分析して、女性と「召命」との関連性を論じている。第八章では、1965年に三部作が『名誉の剣』として改訂出版され、新たな前書きが付記された点に着目し、ウォーの晩年に起こったカトリックを巡る議論とウォーの信仰の深まりを論じている。1962年から1965年の第二回ヴァチカン公会議においてカトリックの典礼の規範が大幅に改訂されたことが、改宗者であるウォーに与えた影響は大きく、その信仰の深さと意義を考察して論じている。

結論として、論文題目にある「第二次世界大戦」と「召命」の関連性が章によっては幾分不明瞭であったり、個々の作品の解釈の細部および全体の章構成において改善すべき点がみられるものの、ウォーの後期作品、特に第二次世界大戦中から戦後にかけて発表された一連の小説群に関して、ウォーが神話をモチーフとして戦争と戦争によって引き起こされる様々な葛藤を描き、その時代の社会を痛烈に批判している点を、詳細に資料に基づいて比較・分析して論じ、一貫してカトリック作家としてのウォーにとっての「召命」のテーマの重要性を包括的に説いたことにおいて、学位申請者の研究者としての優れた資質と将来性を十分に示すものである。

よって、本論文は、博士(英文学)(同志社大学)の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

## 総合試験結果の要旨

2018年6月13日

論文題目： Pilgrimage in War: The Influence of the Second World War and the Theme of Vocation in Evelyn Waugh's Later Novels  
(戦火の歴拝—イーヴリン・ウォーの後期小説における第二次世界大戦の影響と召命のテーマ)

学位申請者： 有為楠 香

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 臼井 雅美

副査： 文学研究科 教授 斉藤 延喜

副査： 文学研究科 教授 金谷 益道

要 旨：

上記審査委員3名は、2018年6月9日14:30から約2時間半にわたり、徳照館第一共同利用室において、学位申請者に対する総合的学力確認の口頭試問を行った。

学位申請者は審査委員から提出論文に関する専門知識はもとより、関連分野への多様で深い質疑に対して的確かつ詳細な応答を行い、本論文の学術的価値が証明され、同時に学力水準の高さが確認された。また、語学（英語・フランス語）においても、十分な理解力と運用力を備えていることが確認された。学位申請者は、上記の口頭試問に先立って、同日13:00から1時間にわたり徳照館第一共同利用室にて公開講演会を行い、研究成果を広く社会に発信する能力を有することも確認された。

以上のことから、学位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分であると証明され、総合試験の結果は合格であると認める。

## 博士學位論文要旨

論文題目： Pilgrimage in War: The Influence of the Second World War and the Theme of Vocation in Evelyn Waugh's Later Novels  
(戦火の歴拝—イーヴリン・ウォーの後期小説における第二次世界大戦の影響と召命のテーマ)

氏名： 有為楠 香

### 要旨：

本論文はイギリス 20 世紀のカトリック作家イーヴリン・ウォー (Evelyn Waugh) (1903-66) の後期作品、主に 1940-1960 年代に書かれた小説について論じるものであり、とりわけ、彼の最後の作品である『名誉の剣』三部作 (the *Sword of Honour* trilogy) を中心に考察する。本論の考察の目的は、作品が書かれた時代のイギリス社会とウォーの作品との関連性、そして彼が希求した、キリスト教徒としての召命のテーマを探ることである。

1939 年にイギリスがドイツ・ソ連と戦端を開いた際、ウォーは海軍に入隊して念願の軍人となる。戦時の彼は情報将校の職にあり、エジプト、クレタ島、ユーゴスラビアと欧州の戦場を転々とした。しかし戦争の現実には彼の理想を裏切るものであった結果、彼に軍隊への幻滅と、より深いカトリックとしての内省をもたらす。戦後もその姿勢は変わらず、ウォーは保守主義者の視点から第二次世界大戦と全体主義の批判を続け、また労働党主導の福祉国家へと進化していくイギリスを批判した。従って、ウォーの思考と活動を辿るには、とりわけ第二次世界大戦との関連を明確にすることが不可欠である。

この論文は以下のように構成される。

第一章では、第二次世界大戦勃発からおよそ 2 年間の、イギリスが戦争の熱狂期にあった時代を描いている『さらなる旗を掲げよ』(*Put Out More Flags*) (1942) を考察する。二十世紀の全体主義どうしの戦争においては、それに対抗する個人の自由や芸術を愛する心は劣勢にならざるを得ないというウォーの思想に触れながら、男性主人公のバジル・シールが戦場に慰めを求めていく軌跡を考察し、ウォーの戦争小説の立脚点を探る。

第二章では『ブライズヘッド再訪』(*Brideshead Revisited*) (1945) を取り上げる。前章で考察した、戦いに身を投じる男性主人公の姿は、それから数年後のイギリスを舞台とする『ブライズヘッド再訪』においては、市民から軍人となり、すでにいくつかの戦場を巡っている主人公のチャールズ・ライダーに引き継がれる。本論は主人公の生涯に重要な役割を果たす空間として三つの都市—オックスフォード・ロンドン・ブライズヘッド—を軸に、それぞれの風土や象徴するものを検討する。その上で最終的にチャールズのローマン・カトリック改宗に寄与したのは、オックスフォードとロンドンを巡った過程で積み重ねられた宗教的感覚と、理想の父親像を求める心の変化であることを論じる。この小説においてウォーは、未来の世代の読者に 1920-1930 年代の記憶を遺産として残したいと思っていることにも言及する。

第三章では『ヘレナ』(*Helena*) (1950) を取り上げる。この作品は古代ローマ帝国を舞台にした聖人伝でありながら、二十世紀の言語・建築や、第二次世界大戦のナチス・ドイツを彷彿とさせるモチーフが含まれていることを指摘し、ウォーの戦争批判・全体主義批判を表した小説として読解できることを論じる。また『ヘレナ』に登場する二十世紀にまつわるモチーフを検討する中で、この後の作品にも続く新たな重要なテーマとなる、「人間はひとりひとり神に与えられた、固有の任務を成すために生まれる」という、「召命」の問題について、ウォーが残したエッセイも照合しながら検討する。

第四章では『愛された者』(*The Loved One*) (1948) と『廃墟の愛』(*Love Among the Ruins*) (1953) の二作品を論じる。これらをまとめて論じる理由は、両者とも第二次世界大戦後のイギリス・アメリカの社会状況を活写すると共に、それらに対するウォーの批判的な見解を含むこと、社会的下層である労働者階級の人間がストーリーの中心になっていること、死が強大なテーマとなっていることが挙げられる。『愛された者』は、ウォーが1947年のアメリカ旅行中に遭遇した、商業主義に基づく葬式産業と巨大な映画産業との関連性に創作意欲を刺激された小説であり、アメリカを覆う商業主義が、次世代に伝えるものを持たない不妊性と表裏一体としてこの小説に描かれていることを検討する。『愛された者』とは対照的に、『廃墟の愛』は、労働党内閣による福祉政策が極限にまで達し、労働者の庇護と犯罪者の擁護が政治の第一義となった、未来のイギリスを描いたディストピア小説である。ウォーはこの小説を、当時政権にあったアトリー労働党内閣への批判としてだけでなく、第二次世界大戦の表象を用いながら、全体主義体制そのものへの警句として書いていることを論じる。

第五章では、『名誉の剣』三部作のうち一・二部を成す『戦士たち』(*Men at Arms*) (1952) 『士官と紳士』(*Officers and Gentlemen*) (1955) を論じる。この二作を論じる理由は、神話と二十世紀の事象の比較描写が顕著であることと、元々はこの二作のみでウォーは同一主人公の戦争小説を完結させる予定であったために相互関連性が高いことが理由である。『戦士たち』は主人公のガイ・クラウチバックがイギリス軍に参加してアフリカに赴任するまでを描く物語であり、本章では冒頭で彼が架空の十字軍騎士、サー・ロジャーの墓に詣で、彼の持ち物であった剣に戦勝を祈る場面から物語が始まることに注目する。この場面から、『名誉の剣』は現代に甦った騎士道物語の枠構造を持つが、本論は主人公を十字軍騎士とする置き換えをそのまま採用するのではなく、むしろ神話・伝説の構造に現代社会の事象を重ねることで、作者ウォーの批判的意図を理解する必要があることを指摘する。歴史的英雄と比較して現代の事物を縮小化することでアンチクライマックスを導く手法はモダニズム文学の特徴と考えられるが、ウォーもまたそれを受け継ぎ、特に『戦士たち』と『士官と紳士』にはその手法が適用されていることを論じる。現代の十字軍騎士として出発したガイは、『士官と紳士』ではスコットランドとクレタ島で軍務につく。本論は小説中に登場する犬をキーワードとし、ガイがギリシア神話に登場するクレタ島の王、ミノスになぞらえられていることに注目する。人間の王としてのミノス、そして死後地獄の審判となったミノスの両方の側面をガイが有することを明らかにした後、古代の王ミノスの再来になり得る資格が現代人のガイに当てはまり得るかを検討する。

第六章では三部作の最終部『無条件降伏』(*Unconditional Surrender*) (1961) を取り上げ、作中に登場する公的文書と私的な言葉の取り扱われ方を論じ、ウォーの后者に対する信頼感を考察する。とりわけ終盤の、迫害を逃れて流浪するユダヤ人難民であるカニイ夫人と、彼女の同胞を救おうとするガイとの会話を取り上げ、彼女の言葉がガイに、戦場の名誉を求める軍人から、一人のキリスト教徒として生きる道を探すことへと大きく転換する上で深く影響を与えていることを検討する。国のために戦おうとしていたガイも、カニイ夫人に言わせれば、戦争への意志に突き動かされ、殺し殺されることで男であることを証明しようとした者たちの一人に過ぎないという気づきは、バジル・シールやチャールズ・ライダーに見られたような「戦場に慰めを見出す男」の最後に辿りつく姿でもある。加えて、ガイが神に語りかける場面のように、対話を求め続けることがキリスト教徒のなすべきことであり、それによって召命へと導かれるのだというウォーの考えを明らかにし、その考えが軍とジャーナリズムによって否定される戦場の事実との対比により、軍隊批判、戦争批判へと繋がっていることを論じる。

第七章では、神話的表象と現代社会の比較という、第五章でも扱った手法に基づき、ウォーの初期・中期作品も交えたヒロイン像の変遷について考察する。ヨーロッパの伝統的な運命の女神・フォルトゥナをキーワードとし、このフォルトゥナ的魅力を持つヒロイン像の成立から葬送までにウォーが込めた思いを検討する。『衰退と転落』(*Decline and Fall*) (1928) と『一握の塵』(*A*

*Handful of Dust*) (1934) を例にフォルトゥナのヒロイン像を確認し、『ヘレナ』『愛された者』について再度考察を加えて、1920-1930年代には上流階級のイギリス夫人にのみ注目していたウォーが、戦後は古代の王族やアメリカの労働者など、多様な背景を持つヒロインを書くようになった変化の理由を探る。また、『名誉の剣』におけるガイの妻ヴァージニアの描写について特に考察を深め、彼女がウォー作品のヒロイン像を総合した人物であることを明らかにし、彼女を小説中で葬り去ることの意義、そして彼女が夫ガイの宗教的成長に果たした役割を考察する。彼の人生における召命の本義である、父として一人の孤児を育てることを自覚する過程において、ヴァージニアの言動が深く関与している様子を召命のテーマに関して論じる。

第八章では、三部作を書き上げてから、それを全一卷の『名誉の剣』として改訂出版するまでに、最晩年のウォーの信仰がどう執筆と関わっていたのかを考察する。1962-1965年の第二回ヴァチカン公会議において、カトリックの典礼の規範が大きく改訂されたことは、とりわけカトリックの伝統と一貫性を重視していた改宗者のウォーにとって大きな打撃となった。その打撃の中、一卷本の小説として改訂出版された『名誉の剣』(1965)に付記したまえがきには、自らの依って立つカトリックの信仰を守り、自らの信仰の記録を読者に届けたいというウォーの願いが込められていることを、実際の改訂部分と比較し、検証する。

このように様々な観点から、ウォーの後期作品と当時の社会情勢には大きな繋がりがあることを明示する。また同時代の世相だけでなく、過去の神話・伝承をストーリーに組み入れ、現代の登場人物に重ねることで、戦争の世紀を生きる現代人を表現しているウォーの手法を解明した。その過程において、第二次世界大戦時から戦後のイギリスにおいて、常に戦争と全体主義を批判し続け、同時に自分の小説においては神からの召命というテーマを守り続けた、ローマン・カトリックの信仰者たるウォーの精神のあり方を明らかにした。